

## チームごっくんニュースレター

# 進行性核上性麻痺



### 進行性核上性麻痺（PSP）とは？

進行性核上性麻痺（PSP）は、パーキンソン病に似た神経の難病で、脳の広範囲にわたる変性によって運動や飲み込み、認知機能など多くの働きが障害されます。特に「歩行の不安定さ」「後ろ向き転倒」「目の動きの障害（上下が見にくい）」などが早期から現れるのが特徴です。

### 症状と経過

初期は転倒しやすさや歩きにくさが目立ち、やがて話しづらさ（発語障害）や飲み込みの難しさ（嚥下障害）、物忘れや行動の異常といった認知症状も加わります。進行は比較的早く、発症から5～6年で寝たきりになり、肺炎が主な死因です。特に発症早期に飲み込みの障害や尿失禁がある場合は、予後（病気の見通し）が悪いとされます。

### 嚥下障害の特徴

進行性核上性麻痺（PSP）では、飲み込む機能も次第に低下します。これはパーキンソン病よりも早く進行する傾向があります。食事のときに、食べ物を口にためたまま動かなくなったり、こぼしたり、吹き出したりといった異常が見られることがあります。また、食事のむせや痰が増えたり、咳が出たりするほか、声が湿っぽくなる「湿声」や、異物が喉に入りかけてうめくような声「呻吟（しんぎん）」も特徴的です。

### 診断と検査所見

嚥下造影（VF）という飲み込みの動きを映像で観察する検査では、食べ物が口や喉に残ったり、気道に入りかけたりする様子が確認されます。舌や軟口蓋（口の奥の柔らかい部分）がうまく動かないため、飲み込みのリズムが乱れたり、食道の入口がうまく開かなくなるといった特徴が見られます。

### 治療について

PSPに対する根本的な治療法はまだありません。初期には一部の抗パーキンソン病薬が効くこともありますが、長続きしません。その他にもいくつかの薬が試されていますが、効果は個人差が大きく、科学的根拠も限られています。

進行性核上性麻痺（PSP）の嚥下障害に対しては、薬ではなく「食べ方・姿勢・食べ物の工夫」が中心です。水分でむせる場合はとろみ剤を加えたり、頭の位置を前に傾けたりして誤嚥を防ぎます。食べ物の味や食感を工夫することで、口の動きが活発になることもあります。たとえば、味が薄いものだと口に入れたまま止まってしまうのに、パリッとした食感のあるものはスムーズに食べられることもあります。

※当院では摂食・嚥下チームで、嚥下の検査・リハビリテーションを行っております。

ST（言語聴覚士）・歯科衛生士を募集しております。